

20人が“私の日中友好”をアピール

第31回全日本中国語スピーチコンテスト

(公社)日中友好協会主催の「第31回全日本中国語スピーチコンテスト」全国大会が2014年1月12日、東京・文京区の日中友好会館で開かれた。全国21の都道府県大会を勝ち抜いた20人が学習の成果を競い合い、日中友好の思いをアピールした。大学生部門では神戸市外国語大学3年の宮田知佳さん(大阪府代表)が、高校生・一般部門では会社員の白井絢奈さん(千葉県代表)がそれぞれ第1位に輝いた。

主催者代表でありさつした村岡久平・協会理事長は、「伝統事業の1つとして続け、大きな波を起こせるようにしたい」と述べた。採点基準などについて説明した審査員長の塚本慶一・杏林大学教授は、「日本で最も伝統のある大会。高いモチベーションとプライドを持って力を発揮してほしい」と激励した。



テレビ取材が入った31回大会。1月12日、東京・文京区の日中友好会館で

午前には高校生・一般部門が行われ、第1位となった白井さんは「桜と梅」と題したスピーチを披露。白井さんは、日中の象徴的な花である桜と梅が、それぞれの国民の気質を表していると説明し、独自のすばらしさや違いを理解し合うことの大切さを伝えた。

一方、午後に行われた大学生部門で第1位となった宮田さんは、「おもてなしの国 中国」をスピーチ。昨年夏に中国を旅行した際に受けた友人の「おもてなし」から、中国人の心に根付く「尽地主之誼」(土地の主人としての務めを果たす)の精神を感じたエピソードを紹介した。

ほかにも、中国人との素朴な交流から感じた友好の気持ちを伝える内容が少なくなかった。全体的なレベルの底上げが感じられ、審査員からは「順位はついたが、差は大きくなかった」との講評があった。第1位の白井さんと宮田さんには、特別協賛の全日空から中国行きの往復航空チケットが贈られた。

当日は、川田勉・外務省中国モンゴル第一課地域調整官、森祐介・文部科学省大臣官房

国際課調査係長、中国大使館から孟素萍一等書記官、王麟・呉明両三等書記官、王昆・日中友好会館中国代表理事、内藤裕之・国際文化フォーラム常務理事、後藤雅彦・日中経済協会総務部長ら来賓を含む約 200 人が来場し、後援の NHK によるテレビ取材も入った。朗読部門の入賞者による発表会では、橋本逸男・協会副会長が賞状を授与した。

朗読発表会 優秀賞の5人が発表し、続教授が丁寧に指導

毎年恒例の「朗読発表会」が、スピーチ部門の審査中に行われた。優秀賞に選ばれた9人のうち5人が出場した。表彰式が行われた後、壇上でそれぞれの課題文を朗読した。発表ごとに、続三義・東洋大学教授が一人ずつアドバイス。続教授は、日本人が苦手な「XU」や軽声の発音、声調の出し方のコツ、文の抑揚などの細かい点まで丁寧に指導した。最後に手本として、自ら全課題文を朗読した。



朗読発表者にアドバイスをする続教授

朗読は、スピーチ部門の入門的な位置付けとして、学習者に人気がある。近年は、朗読部門出場を経てスピーチ部門に挑戦する人も増えている。昨年で開催された各地区協会大会では、朗読発表者が大きく増加した。全国大会への出場争いは激しさを増し、発表者のレベルもさらに上がっていきそうだ。

講評 感動を与える簡潔なスピーチを 日本大学教授 平井和之

出場者のレベルは非常に高く、子音・母音など個々の発音に関しては、特に問題はなかった。差が出たのは「表現力」と「構成力」だと思う。

順位が付くコンテストである以上、観客を引き込み、感動を与えるといった工夫をしなければならない。そんなスピーチをするためにはどうすればよいでしょう。

内容は、貴重な体験や珍しい話でなくても、構成によって面白く伝えられる。日常の小さな事柄を、いかに上手くまとめあげるかが大切。その際、文は長くなくてもかまわない。内容をたくさん詰め込みすぎると、何を伝えたいのか焦点がぼやけてしまう。

また、時間内に収めようと、焦りも生じる。受賞された方々は、内容の構成力に加え、アクセント、スピードのコントロール、ポーズの置き方といった表現力が際立って良かった。書面語の多用や、連体修飾語の長さや使い方が不適切で、内容が分かりにくくなって

いる方がいた。人間にとって、聞くのと読むのでは、受け取り方が異なる。短く簡潔に、感動を与えるスピーチを目指何が足りないのか。してほしい。



大学生部門第1位
大阪府代表
神戸市外国語大学3年
宮田 知佳

感情表現を磨くため、有名スピーチ聞き研究した

他の大会に出場経験があるが、いつも2位や3位。中国人を含む友人にスピーチを聞いてもらおうと、「発音はきれいだがロボットみたいだ」と言われた。感情がこもっていないと、どんなに良いスピーチでも心に届かないことを痛感した。

「感情表現はできる限りの準備をしよう」。今回はそう意識して取り組んだ。中国語に限らず、日本語、英語、有名なスピーチを手当たり次第に聞くと、上手いスピーチはやっぱり何か伝わるものがあつた。文章の切り方、抑揚の付け方など研究を重ねた結果が第1位につながったと話す。

「中国の生の声を伝え、日中友好の懸け橋になりたい」。学習の原動力になっている。

中国文化の核心まで、理解していきたい

「学生の頃から出場したいと思っていたので、優勝したのが信じられません」

学習のきっかけは、日本と同じく漢字を使用し、音楽のような流れるリズムで発音する中国語に魅力を感じたから。皆が共感できるテーマを選び、それを「どう伝えるか」に重点を置いた。

仕事ではあまり中国語は使わないため、自由時間とにかく声に出した。「仕事と勉強の時間を切り替える事で、いつも自然と新鮮な気持ちで中国語と向かい合っていたのかも知れません」

今後は「中国人的な考え方や捉え方を知り、受け入れること、そうした中国文化の核心まで理解していきたい」と考えている。



高校生・一般部門第1位
千葉県代表
会社員
白井 絢奈